

念願の谷川岳を前々から縦走してみたく思っていたが、やっとその願いが叶った。と言うのも横浜に石野氏が転勤になっていたからこそ実現できた山行である。

この谷川岳は一の倉岳と同様に一昔前に一躍有名になり悲しい事に700人ものクライマー達を飲み込んでいる「魔の岩」としても有名である。今はそのクライマーたちも数少なくなっってロープウェイを利用してそれらの山々の尾根を縦走する登山者がふえている。縦走は馬蹄形縦走とも言われ歩んできた山々が手に取るようにいつも見渡せていて高度感も楽しめる。我々はその縦走に白毛門沢の遡行を取り入れて計画に及んだ。

今回は沢登り装備も担がねばならないので必要最小限にグッズも留め、また避難小屋泊まりと設定してツェルト持参でシュラフは省いた、それでもザック総重量は13kgである。



谷川連峰カモシカ縦走

2002.9/21 ~ 22

石野美輝郎 53才
大塚賢一 47才

20日

久々に石野氏と合流して上大岡の居酒屋で盛り上がる。23時就寝。

21日 晴れ (土合>白毛門沢遡行>朝日岳>清水峠避難小屋)

寮を4時半に出て京急、JRと4本も乗り換えて土合駅に着いたのは10時を回っていた。なんとこの駅は無人駅である。一昔前まではクライマーで大いに賑わっていた駅であろうに今はその気配は全くない。ホームを降りるとなんと地下鉄のように薄暗く日本の駅



日本一のもぐら駅土合

ではないように異様にさえ思える雰囲気である。地上に出るのに何と階段を600段は上って行かねばならない。昔のクライマーはこの





白毛門山頂

階段を一步一步踏みしめて緊張感を高めていったのだろう。

外に出ると朝靄がかかっていた山々が見事なスカイブルーの空に包まれていた。

早速、石野氏の友達も含める700人からの名前が刻んである慰霊塔に手を合わせに行く。なんとそこには早や今年に亡くなった人も刻まれていた。

今もなお人を飲み込み続ける「魔の岩」である。



白毛門沢の出会い



タラタラのセン

東黒沢のナメ滝を少し遡るとすぐに白毛門沢との出会いに当たる。ものすごい長いナメ滝の連続で兵庫の沢との違いに驚かされ自然に歓声上がる。タラタラのセンと呼ばれる15mの大滝まではあまり高巻きもせずに行けるがこのタラタラのセンはそうはいかない。右岸のスラブ状の草付きを慎重に巻くがその高度感足滑らせば一巻の終わりである。ジジ岩、ババ岩が見えてくるころ、沢床から水も枯れだしてきたので小休止を入れる。山頂はもうすぐそこに見える、後を振り向けば土合の駐車場も見え非常に急登の連続だったのがわかる。ここからはいやらしい草付きのスラブの連続で慎重に高度を稼いでいく。

13:45 白毛門山頂 (1720m)



一の倉の衝立岩

膝元の熊笹を鷲掴みにしながらやっと山頂着。通常4時間遡行の沢を2時間45分でたどり着いた。2人ともフリークライミングの連続でハイピッチであった。

再び装備変更で登山靴に履き替え今度は縦走じたくである。沢靴が水を含みザックに重み加わる。



慰霊塔



700人あまりが刻まれている

11:00

土合橋手前(700m)のバス停から白毛門へ入る登山道から別れて湯桧曾川水系の東黒沢の手前で沢登り装備に変更する。水は透明度抜群で冷たさも申し分ない、また景色も開けていてうっとうしさは全くなく広々といて太陽の光を身体一杯に受けマイナスイオンたっぷりである。しかし岩が巨大な雪渓で洗われているらしく全くに手がかり、足がかりの無いツルツルした大岩が多いので沢靴の絶妙のバランスが要求されるところが非常に多い。ナメ滝と連爆、フィナーレは山頂に突き上げるスラブの連続で最後は熊笹を頼りに鷲掴みで登っていく。



笠ヶ岳避難小屋

視界は360度パノラマで谷川岳の滝沢雪渓、一の倉の衝立岩など全てが見渡せる。遠くには武尊山、火打ヶ岳なども見渡せる。

しかしここからの今日に行程はまだまだいくつものピークを越えて遙か彼方の清水峠である。

15:00 笠ヶ岳山頂 (1852 m)

素晴らしく視界に開けた稜線歩きである。高々1800mほどの稜線なのに視界をさえぎる大木が全く無い。こんな低山であるのに雪渓が残っているのは雪が大量に降り大きな木が生息できない立地になっているのであろう。冬での厳しさが想像できるようだ。

笠ヶ岳のドラム缶を2つ割りにしたような蒲鉾型の小さな避難小屋を後にして朝日岳へと向かう。

15:50 朝日岳山頂 (1945 m)

谷川岳方面にガスが立ちこめはじめる。

小鳥帽子、大鳥帽子とピークを越えると山頂に着く。そこは池塘が点在し夏には多くの高山植物の咲き乱れたあとを残す素晴らしい朝日ヶ原である。



朝日ヶ原

膝下の熊笹、五葉松、シャクナゲ、ナナカマド、そしてNZを思わすきれいな草原が紅葉していて今までに見たことのない不思議な世界である。幕営禁止ではあるが水場もありで絶好の場所である。

17:15 清水峠避難小屋 (1450 m)

朝日岳を少し降りると指導標の立つジャンクションピークに着く、ここが巻機山への分岐であるが残雪時期でしか行けないほどに排道に



送電線監視小屋と避難小屋

なっている。

ガラガラの危なっかしい道をどんどん下っていくと送電線が立ち並ぶ清水峠避難小屋が見えてきた、しかし小さい小屋の周りにはテントやツェルトを張っているではないか!、これは小屋は満員かと思いやたり着くとなんとか2人分は確保できた、それも2階で快適な場所だった。水は送電線監視所でわけてもらったが、ここは暖房もきいていてテレビもありで快適な小屋であった。

今日は計算上ではヘッドライト歩行で19時にたどり着く予定であったが2時間も短縮でき明るい内に着いて、夕焼け空の下で夕食をとることが出来た。他の登山者



夕焼けに染まる七ツ小屋山

と話しが弾み我々の行程を教えると驚愕していた。

20:00 就寝

夜中は多少冷え込んだがシュラフが無かったても問題なかった。

22日 曇り/雨 (清水峠避難小屋>茂倉岳>一の倉岳>谷川岳>万太郎山>土樽)

4:30 起床

5:50 朝靄の中を七ツ小屋山に向けての急登が始まる。

山頂手前で大源太山 (1593 m) への分岐がある、この山は上越のマッターホルンと呼ばれるだけあって槍ヶ岳のように切れ立った鋭峰である。

このころになると蓬ヒュッテからの登山者と行き交うようになる、ほ

とんどの登山者が天神平までのロープウェイを利用して我々とは逆コースを縦走している。

6:20 七ツ小屋山山頂 (1674m)

この辺りは熊笹も大きくなり腰まであり、登山道はきれいに刈り込んである。



蓬ヒュッテ

6:55 蓬峠ヒュッテ着 (1529m)

ここから土樽への分岐道もある。

真っ黄色のヒュッテでこの馬蹄形縦走路の唯一の有料山小屋である。ここも早々と通り過ぎて武能岳への登りにさしかかる。

7:40 武能岳山頂 (1750m)

昨夜、茂倉岳避難小屋に泊まっていた登山者が腰を下ろして朝食をとっていた。

8:50 茂倉岳山頂 (1977.8m)

この山は谷川連峰の中で最も高い山である。この登りはきつかった〜(〜;)。

天気もどんよりした雲が沸いてきている、土樽からきた登山者に天気予報を聞くとやはり今晚から明日にかけて雨模様と言っていた。予想

通りの天気予報だったのでやはり行動を変更して今日のうちに下山することにした。変更コースは万太郎山から土樽へ向かうことにする。

10:10 オキノ耳 (1977m)

一の倉岳の登りの途中で1人の登山者と出会うが彼は靴が壊れたとってガムテープを巻いて補修



武能岳より東屋頂

していた、昨日は西黒尾根から谷川岳に縦走中にはがれたとって工事中の肩の小屋に急遽泊めてもらったと言っていた。もう片方もはがれそうなのでガムテープを分けてやる。しかし緊急補修キットぐらいは持っていてほしいものである。

一の倉岳 (1974m) を経て途中で「ノゾキ」というところから衝立岩が見える。雪彦山の5倍はあろうかと思われる1000mほどの直壁にへばりついているクライマー達がゴマ粒のように小さく見える。ものすごい高度である。また草付きもあって難儀する岩壁である、ここを冬季に攀じるといふのだから考えられない精神力である。一の倉岳には2~3人が泊まれる極小の避難小屋があった。

オキノ耳からは観光客化としており大勢の人たちで賑わっている。



高校生パーティー

11:04 オジカ沢の頭 (1810m)

オキノ耳からトマノ耳 (100名山) を経て谷川岳肩の小屋 (新築中) から西に進路をとり少し下ると中ゴ-尾根沿いに谷川温泉へ降りるルートがある。そこも通り過ぎしばらく行くとオジカ沢の頭へのヤセ尾根への急登が始まる。ここで高校生パー

ティーとすれ違うが急なヤセ尾根のためにこわごわであった。ここから狙グラへの向かう稜線があるがここも排道である。しかしひとたび雪つけばここら一帯は木々などのさえぎるものもなく素晴らしいゲレンデ化となし山スキーフィールドになるだろう。

11:45 大障子避難小屋 (1675m)

オジカ沢の頭から高度を下げながら小障子の頭を越して登りに変わり大障子避難小屋に着く。ここから15分下ったところに水場があるので石野氏に助けを乞う。この避難小屋は稜線上に建っていて眺めも良好で小屋内も広々としていて快適であろう。

12:35 万太郎山 (1954m)

避難小屋から大障子の頭 (1800m) を越して再び下り、腰ほどの熊笹の中の急登の連続で今日の最終ピーク地点に到達。ここから見る景色は昨日からの縦走行程が手に取るように見える、それほど近くにおいて遠いのである。

湯桧曾川を懐に土合から谷川岳、万太郎谷を懐に谷川岳から土樽の馬蹄形を二つにしたS字形縦走である。

14:35 土樽駅着

万太郎山からは北へ道を取り吾策新道へと足を運ぶ。出だしは急な下りで疲れた膝にくる。どんどん高度を下げて樹海の中へと降りていく。途中に大木にびっしりと張り付いたナラタケを摘む。おいしそうな月夜タケがびっしりと生えているがこれは毒キノコなので食べられない。

うんざりするほど長い山中の道を足早に駆け下りていくがなかなか下界には着かない。やっとのことでアスファルト路に出て関越自動車道をくぐると、小さな無人駅土樽に着く、次発は15:30。乗車待ちは登山者ばかりである。ちなみにこのJRは3時間に一本である。

途中、水上で下車して温泉で疲れを癒し、帰りの車中で喉を潤しているころ空が泣き出し本降りとなっていた。

明るく日は雨も上がっていたがどんよりしている。山はまだ雨でぬかるんでいよう。

今日は時間もあるので横浜のIBSに寄り、中華街で腹ごなしをして16時東京をあとにした。あいにくの曇天で行きも帰りも念願の富士山が新幹線内より見えなかったのが残念である。

PS.

初めての関東の山行であった。関西からのアプローチが非常に遠いためになかなか実現出来なかったが念願の谷川連峰を縦走でき石野氏に感謝するしだいである。特に白毛門沢はたいへん素晴らしき遡行であった。しかしこの2日間は両日共にものすごいスピード登山であっ

た。

この山々の感想として最も印象に残ったのは2000mにも満たない低山なのに大木が全く生えていないこと、それに視界をさえぎるものがないので空気が澄んでいたら富士山はおろか遙か彼方の山々まで見渡せて快適な稜線歩きになるだろう。しかし真夏は暑すぎるかもしれない、また雪が積もれば山スキーでの縦走も大変おもしろいルートがとれるだろう。しかし関西からは遠い・・・。



谷川岳と一の倉岳